名前に鑑みる家族関係：名前の由来に関する一考察*1

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ*2

Familial relationships as seen in names: A study on the reasons behind naming choices

UNSER-SCHUTZ, Giancarla

Abstract

Although names are most obviously involved in the identification of individuals, they also indicate a wide variety of information about their bearers, from gender and ethnicity to religion and beliefs. However, names may actually speak more about their givers than their bearers, and they can play an important role in establishing children's positions within families. This suggests that changes in naming practices may be motivated in part by changing familial relationships, which is particularly relevant for contemporary Japan given dramatic changes occurring in recent years. To assess these possibilities, I conducted a study on who is involved in choosing names using a corpus of parents' messages in one Japanese municipality's newsletter. Analysis showed that while it was most common to not ascribe any specific individual as the giver, those most commonly given were parents themselves, followed by children's older siblings, whereas those outside of the nuclear family (e.g., grandparents) were mentioned infrequently. Combined with similar results from analyses on for whom children were named and commonalities between names within families, I argue that these results reflect greater changes in the sense of private space; the role of the nuclear family therein; and increased focus on the bonds between siblings.

［Keywords］ naming practices, name origins, onomastics, kanji, family

和文キーワード：名付け習慣、名前の由来、命名学、漢字、家族

序　論

たかが名前、されど名前。我々が意識を持つ前にはすでに名前が付けられており、当たり前のように自分の所有物、いや、自分の一部として受け止めている。しかしながら、名前は必ず誰かに付けられたものであり、決して自然にあるものではない。名前を通して、持ち主の性格や運命を見通そうとすることがあるが、Benson（2009, p.180）が指摘するように、我々が他者に因まれ、他者によって名付けられるため、ある意味では名前はその持ち主自身のもののみならず、名前を付けた側のものでもある。名付けという行為を観察することを通し、「……対象への期待と抱負をもみることができる」（田中，2014，p.5）が、名付けを観察する意義はそれ以上である。名付け習慣が時間の経過によって変わっていくとき、名前はそれらが存在する社会的制度を反映するのみならず、それらの社会的制度における変化も反映する（Plutschow, 1995, p.1）。同様に、名付け習慣における変化は、子どもに対する希望のみならず、むしろ名付ける行為に関与する人の関係等を反映していると考えた方が適切であろう。

この指摘は、今日の日本社会にとって非常に有意なものである。というのも、日本の名付け習慣が大きな変化の途中にあることが、すでに幅広く報告されている。ことに「－子」の付く名前が激減していることが注目されている（橋本・井藤，2011；小林，2001等）が、名前特有の接尾辞という止め字や名前に用いられる字数においても多くの変化が見ら

＊1　本研究は JSPS 科研費70632595の助成を受けたものである。

＊2　立正大学心理学部専任講師

れている（小森，2002）。こういった変化の原因として価値観や家族関係・家族構成における変化が頻繁に指摘される。近年の新しい名前が、ユニークさの重視と個人主義的価値観を反映しているという主張がその一例である（Ogihara et al., 2015；小林，2009）。また、生まれ順を表現する数字の入った男性名（「一郎」や「三郎」）が激減している（本田，2005）ことが、1 世帯当たりの子どもの平均人数が減っていること（西野，2009）と関係していると十分に考えられる。

こういった変化に伴い、名付け習慣における世代間の差が広がっており、ことに低年齢の子どもとその親、また低年齢の親とその親、つまり低年齢の子どもの祖父母とでは、まったく異なる類の名前を持っている家族が大半だと推測することができる。名付けという行為は、子どもを社会的関係の中に位置付ける（Bodenhorn & vom Bruck, 2009, p.3）が、このことから名付けにおける変化が、子どもの社会的関係の中の位置付けにおける変化も起きていることが読み取れるであろう。一つの可能性は、子どもの名付けにかかわる家族のメンバーが変わったと考えられるが、ことに祖父母世代が関与しなくなってきたことが、名付け習慣における変化の理由として指摘されている（Otake, 2012）。

上記のことを踏まえ、近年の名付け習慣における変化が家族関係における変化をどう反映しているのかを明かにすべく、本研究においては、現代日本の家族では誰が子どもの名付けに関与しているのか、また該当する場合、誰に因み・誰との関係が重視され、名前が選ばれるのかを観察した。また、名前そのものを通して、家族関係を強化する試みがどれほど見られるのかを検討することを目的に、近年の子どもと親、または兄弟間の名前上の共通点の有り方を検討した。本研究においては、その目的を果たすために、広報誌に見られる名前の由来に関するメッセージを分析した。分析の結果、名付けは主に親と子ども自身の兄弟という核家族で行われており、祖父母といった親戚を含め、核家族外の人が積極的に関与していないことが明らかになった。同様に、名前の由来についても、核家族以外の人に因むことは少なかったことが確認できた。また、子どもと親の名前上の共通点に比べ、兄弟同士の共通点がより多く、現代では名付けは、核家族、その中でもとくに子ども間の絆を深めるために機能していると考えられる。上記の結果を踏まえると、新しい名前の普及は、上の世代が関与していないから可能であり、価値観が継承されないことにつながっていると、やや否定的に解釈できる一方で、核家族の関係の強化につながっているという肯定的な捉え方にも解釈できる。

名前を付ける際に何を重視するか

日本語における名前の特徴の一つは、新しい名前の創造に柔軟だということである（本田，2005）。日本では、1872年より一人の個人に対し、一つの姓・一つの名のみが認められており、原則として改名することが禁止されているが、既存の名前であること・性別を必ず表現することを必要とすることで名付けを制限しているアイスランド（Willson, 2009）や、3,000の名前のリストから選ぶことが義務付けられているタジキスタン（Asia-Plus, 2015）と比べ、日本では名付けに対する制限が少なく、名付けは比較的自由である。実際に、現代では名前に用いられる漢字の選択が名付けの最大な制限である。名前に用いられる音声的な制限等は設けられていないのに対し、名前に用いられる文字は2,136字の常用漢字、861字の人名用漢字、平仮名・片仮名、踊り字で制限されている。一方では、その中の文字を使用すれば、名前が通常認められ、当て字的な読みでも可能である。[(1)]

だが、名付けに対する制限が少ないからとはいえ、実際問題としてほとんどの人が「好き勝手」に新しい名前を作って付けているというわけではない。むしろ、「……人は名づけにおいてすら、一定の枠の中で行われなければならない点、完全に自由ではなく、所属する共同体の強い圧力を受けている……」（田中，1996，p.82）のである。この事実は、最も人気な名前を観察すると分かりやすい。20世紀中旬には、人気な名前のほとんどが類似していたことより、上記の制限に伴い名前が一種の標準化を経たと考えられる（Unser-Schutz, 2016）。その顕著な一例は、「－子」の付く女性名である。明治時代以前は貴族にのみしか用いられなかったにもかかわらず、1920年代には、80～90％の女性名が「－子」の付く名前であった（小森，2002）。男性名においても、字数や構造上の特徴も同様に見られる（小森，2002；Unser-Schutz, 2016）。その時代背景に、名前に用いられる漢字に対する制限は、日本語、ことに日本語の表記における民主化の一部として実施されたことがあるが、一定の標準化が目標だったと考えられる（人名用漢字の誕生等について、円満字，2005を参照）。

一方では、20世紀半ばの標準化に反し、近年においては、年々の人気な名前における変化が加速している（平山，2011）。しかし、新しい名前に対する評価は決して芳しいものではない。漢字の用法が標準的でないことが近年の名前の最大の特徴である（佐藤，2007；徳田，2004等）ことより、読みにくいとされている点で批判の的になっている（佐藤，

2007）（図１）。こういった理由から、新しい名前が社会的に機能できない（佐藤，2007）、また面接のように、名前を題材に他者より判断される場面において子どもに対し悪影響をもたらす可能性がある（牧野，2012）と批判されている。「DQN ネーム」、つまり教養のない・頭の悪い名前という流行語ができたように、こういった新しい名前を付ける人に対する批判も辛辣である。また、Unser-Schutz（2015）にて主張するように、新しい名前のこういった捉え方は、若者問題―つまり、「公的言説および行動の主たる場において問題とされている「若者」にかかわる推定上の状況」（Toivonen & Imoto, 2011, p.16）[(2)]―が「発見」される現象と関係しているとも考えられる。

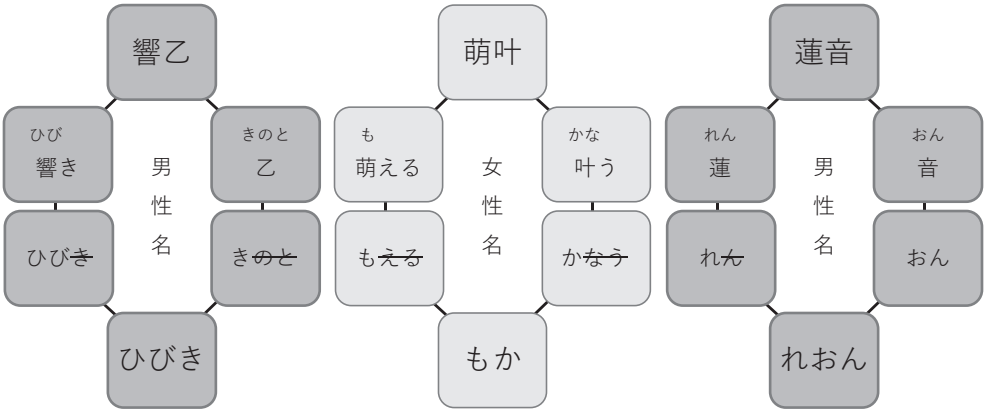

図１　新しい名前の例

名前が社会的に機能しないという主張の意味を十分に理解するために、まずは名前の機能とは何かを再考察する必要がある。名前の最も特徴的な機能は、いうまでもなく個々人を区別することであろう。寿岳（1990）が指摘するように、名前が持ち主の国籍・性別・年齢・地域・家系について多くの情報を潜んでおり、強い「みだし機能」を持っている。だが、「名は体を表す」ともいうように、名前に言霊、つまり名前自体に一種の力があるという考え方が根深い（Plutschow, 1995）。これはことに明治時代以前の諱（いみな）と実名敬避の習慣に表象されている考え方だが、現代社会においても名前に言霊があると類似した信念が通用している。なぜならば、こういう子どもになってほしいという願いを込めて名付けるのは、名前には子どもの将来に対する影響を及ぼす力があると考えられているからである。同様に、牧野（2012）のいう子どもの名前が「危ない」という、「悪い」とされている名前に対する懸念も、名前に力があるからこその懸念である。

名前と名付け行為のもう一つの役割は、名付けを通して絆を深めることがある。名前が親からの最初の贈り物といわれることが多いが、むしろ自分達の最初の物語とでもいえるであろう。株式会社マーシュ（2015）が実施した調査では72％の人が、自分の名前の由来を知っている結果になったが、名前は時間をかけ、子どもを想って付けるものである。その過程を通し、大きくなった子どもに対し伝えられる「私たちがあなたのことをこれだけ思って待っていたよ」という物語になっていく。その物語の登場人物は親と名付けられる子どもだけではない。現在、法律的に子どもの名前を届けるのは親もしくはその代理のみではあるが、名前を決める段階でまわりの大事な人や家族にも意見を求めることや相談することを通し、これから生まれる子どもにかかわらせ、子どもとの関係に精神的に投資することを促進させることもある。

つまり、流行にあやかって付けようが、姓名占いで選んでいようが、名前にはまわりの「人々の思いが反映されている」（田中，2014，p.150）のである。ことに上の世代に参加させることを通し、知識や名前の価値観の継承につながる。明治時代以前、両親・その他の家族の人が名前を付けることが一般的ではあったが、候補名前の中からまだ字が読めない子ども自身に選ばせる、また神職や産婆等に選んでもらう習慣も日本各地で見られた（田中，2014，pp.155－158）。だが、参加させないことにより、逆に溝ができるとも考えられる。現代日本ではまさに世代間の交流、ことに高齢者と子どもの交流が減少しており、年齢による差別が増加している（Thang, 2003）。核家族の普及が、祖父母の名付けに対する関与を減らしていると考えられるため、名付けにおける変化の理由として挙げられることがある（Otake, 2012）。

名前そのものが、子どもと家族や他者との関係を表すこともある。一つの方法は、実際の名前あるいは名前の一部を、

子どもと家族の一員が共有することである。明治時代以前は、ことに男性名の場合、同家系内で名前の一部を共有する習慣があった。同家系の男性児全員に付ける実名の通字（とおりじ）、また同家系の中の同世代の男性児全員に付ける系字（けいじ）がその典型例である。また、相続等に当たり大人になっても親族の名前を襲名することも、こういった例に該当するであろう（通字・系字・襲名の習慣について、田中，2014を参照）。現代社会において、核家族という世帯形成が一般的になっており、子どもの平均人数も少なくなってきたことや、家制度が衰退していることもあり、通字・系字はどちらも現在それほど一般的ではない。襲名も、歌舞伎のような伝統芸能といった特定の職業を除き、通称的にも行われていない。1872年に決定された法律により、一人に対し使える名前が一つに限定され、改名も認められなくなったこと（大藤，2012）や、元服を機にする実名を決めることが1874年頃に途絶えたこと（Plutschow, 1995）も、こういった変化とかかわっているであろう。

しかし、体系的な形で名前の共通性を作り出すことはなくても、家族内で親の名前から一文字を付ける、あるいは子ども同士で類似した名前（同構造である、共通漢字がある、等）を選ぶということも十分に考えられる。こうして考えると、名付けにより、子どもを家族の一員として位置付けられることは明らかである。だが、反対に「異常」とされている名付け習慣が、家族との距離を大きくする可能性がある。子どもと親、親とその親、つまり子どもの祖父母の名付け習慣の差で、互いの価値観のギャップやズレが顕著になりやすい。新しい名前に対する危機感は、こういった問題にも原因があるであろう。何より、若者が日本の最も重要な「自然資源」の一つ（Goodman, 2011, p.164）といわれているが、その資源の開拓のためには、若者の通常通りの社会化が不可欠である。名前は「すぐれて人生論的なものである」（寿岳，1990，p.96）ことを考慮しては、名付け習慣に表象されている価値観の変化が、より大きな現象を反映していると言えよう。これを踏まえ、主に誰が名付けに関与しているのか、また名付けを通して他者との関係がどう表現され、どう強化されるのかを観察すれば、名付け習慣を超える社会的変化に対する洞察が得られるであろう。

調査の概要と方法

本調査に用いるデータとして、自治体の広報誌に掲載されている親からのメッセージを活用する。日本の1,788の自治体のほとんどが広報誌を発行しているが、その目的は、ただ単に情報を通知させるだけではない。現在の自治体広報誌は、「お知らせ型」広報から、より住民の関心やニーズにあった内容になるように、変革が求められている（マッセ大阪，2013）。「知らせる」以上の機能のあるコンテンツの一つは、子どもの出生を通知するコラム、またそれに関連する親から子どもへのメッセージを含んだ、コミュニティに子どもを紹介するコラムである（以降、「子ども紹介コラム」と呼ぶ）。子ども紹介コラムの多くは、「わが家のアイドル」（埼玉県伊奈町）や「満一歳のごあいさつ～わが家のたからもの」（高知県土佐市）といった名前で掲載されていて、親が自ら手紙を送る形が一般的であり、子どもの名前や住んでいる地域の情報が掲載されている。また、無料で自治体のホームページからダウンロードできることが多く、戸籍を管理する、つまり事実上名前を管理する自治体が発行する情報誌であるため、一種の準一次資料だと考えられる。

子ども紹介コラムの大半が、子どもの名前に読みの振り仮名をつけている点で、名付けの流行を追跡するための貴重な資料になり得ることは、すでに佐藤（2007）によって指摘されている。広報誌の情報をまとめている jichitai.com のリンク先で当時、掲載されていた日本の全自治体の50％強にあたる1,020広報誌の調査をした結果、全部の50.39％に子ども紹介コラムが掲載されていること、その子ども紹介コラム全体の97.28％に子どもの名前とその振り仮名がついていることが明らかになった（Unser-Schutz, 2014）。だが、子ども紹介コラムは、名付け習慣における変化を把握する他に、子どもに対する希望や理想的な家族関係を考察するためにもなる。本論文では、調査した1,020広報誌の中、唯一名前の由来に関するコラムが連載されている北海道の乙部町の「わがやのアイドル」を活用することにした。子どもに対するメッセージを載せている広報誌は他にも多いが、子どもを紹介するメッセージとは別に、名前そのものに関するコラムが、名付けの過程を理解するのに非常に貴重な資料である。その一例を図２に示す。

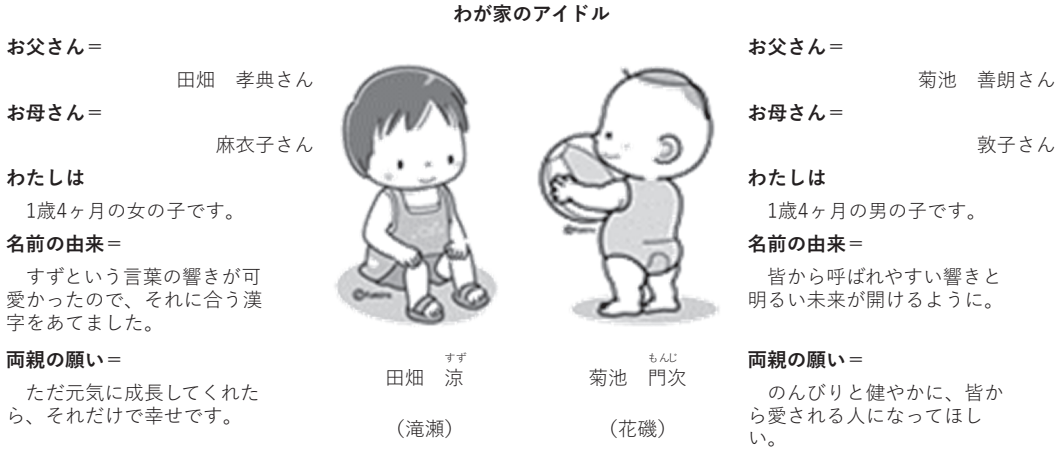

図２　「広報おとべ」に見られる親からのメッセージの一例
（2015年９月号の再現・クリップアートは http://www.fumira.jp/ より）

2016年10月末の時点で、乙部町の世帯数は1,930戸、全人口は3,920人（男性：1,809人、女性：2,111人）となっている（乙部町町民課，2016）。平均して１世帯当たり2.03人という計算であるが、全体的に乙部町では過疎化が進んでおり、2011年10年末日の人口（4,372人）と比べ11.34％縮小している。2010年の国勢調査結果では、当時の人口（4,408人）に対し、年少人（０～14歳）が495人（11.22％）、老年人口（65歳以上）が1,516人（34.39％）で、年少人口指数・老年人口指数はそれぞれ20.7、63.2であった（乙部町総務課企画係，2012）。乙部町と比べ、北海道全域の老年人口指数は39.0であったが、このことからも分かるように、乙部町の過疎化が深刻である。実際に、「わが家のアイドル」のコラムが、2015年４月より出生数の減少により不定期になったが、これは乙部町の過疎化の反映であろう。家族構成に関しては、最新報告である2005年の国勢調査結果では、全1,898世帯のうち、18才未満の子どもがいる世帯が419戸、そのうち子どもの祖父母に相当する64戸（15.28％）であったが、核家族化が進んでいることも明らかである（乙部町総務課企画係，2010）。子ども紹介コラムの目的が、子ども紹介コラムを掲載している「広報きょうたんご」の「生命（いのち）の絆」の最初回で記されたように、「生命誕生の喜びと感動、生命の大切さ」を市民みんなで分かち合い、子どもを産み育てるまちづくりを進めて……」いく（京丹後市秘書広報広聴課「広報きょうたんご 生命の絆」係，2010，p.29）ことだと考えれば、乙部町にとっては、当「わが家がアイドル」の役割が実に重要であり、このことも不定期掲載になったお知らせで綴られた「広報紙でも人気コーナーでしたので残念です」（乙部町総務課企画係，2015，p. 18）からも読み取れるであろう。

本研究では、2004年４月号から2016年10月号（約12年分）を対象にした。全部で285通のメッセージが得られたが、そのうち、４つが多胎出産（三つ子１組、双子２組）で同一メッセージであったため、重複のものを対象から除外した結果、対象のメッセージは281通となった。二つのメッセージ（「名前の由来」「両親の想い」：図２）のうち、本研究では「名前の由来」のみを対象にし、UniDic（国立国語研究所，2016a）を用いる茶まめ（国立国語研究所，2016b）で形態素解析を行った後、名付けの過程に関与したことを示す家族や人物に関するキーワードを抽出した。また、「名前の由来」の他に、子どもの名前と親の名前を比較し、共通の要素の有無を検討した。親の名前には読み仮名が振られていないため、本研究では⑴子どもと親の名前に同一字数が用いられているのか（例：息子「大和」と父「智明」－それぞれ２文字）、また⑵子どもと親の名前に共通の文字が用いられているのか（例：息子「咲翔」と父「翔太」における「翔」）を確認した。

最後に、親の名前と住んでいる地域で、過去に他の子どもの紹介で掲載された家族に生まれた子どもなのかを確認することが可能であることから、子どもの名前を兄弟同士で比較し、親の名前と同様に共通の要素の有無を検討した。親の名前の確認事項の他に、⑶名前に同一拍数が用いられているのか（例：《ほたか》と《なつい》－それぞれ３拍）、⑷名前に同一単音が用いられているのかを確認した。⑷に関しては、両名前に同一位置に同じ音節が含まれている（例：《ここね》と《ゆいね》における《ね》）、同一位置ではないが両名前に同じ音節が含まれている（例：《ありさ》と《しゅり》における《り》）、両名前が同一単音で始まる（例：《りゅうのすけ》と《りりは》における［ɹ］）のどちらかを満た

していることを基準に判断した。なお、名前の共通特徴に関しては、全285のデータを対象にした（男性：139人、女性：146人）。

結　果

名付けに関与した人・名前の由来に関わる人

281通のメッセージのうち、大半（181通）が具体的な人物を挙げておらず、選ばれた理由のみを述べた。付けた人物が具体的に指名された103通のメッセージに対し、平均1.43人（$SD = 0.59$）が指名された。父・母を個別に挙げたメッセージはそれぞれ64通、43通となり、両親を共に指摘する18通のメッセージと共に、子どもの親が最も頻繁に取り上げられた人物であった。親に次いで、最も頻繁に関与したと挙げられたのは子ども自身の姉・兄であり、それぞれ９回、４回挙げられた。親や兄弟と比べ、祖父母の関与を示すメッセージが少なく、祖父は４回に対し、祖母は１回指名される結果となったことから、名付けに関与している人物は主に核家族に留まっていることが分かる。

表１　名前に関与した人と子どもの関係（同一メッセージに対し複数キーワード可）

＊メッセージ通：データがあったメッセージ数、付けた人：その人が名前を付けた、由来：子どもの名前がその人に由来する・その人との関係を強化するために付けられた、兄弟：「姉妹」「兄妹」「兄弟」のまとめ

子どもとの関係		メッセージ	付けた人	由来
		通	103	65
親戚	核家族	両親	18	3
		母	43	5
		父	64	11
		姉	9	23
		兄	4	14
		兄弟		4
	家族一般	祖母	1	
		祖父	4	7
		両家		1
		家族	4	1
家族にとっての大事な人				3
有名人・登場人物				3
合計			147	75

名前を選んだ人物と同様に、具体的な人を考えて名前を付けたというメッセージが少なく、全メッセージの22.46％に留まった。因む人が明確だった65通について、一つのメッセージに対し、平均して1.15人（$SD = 0.36$）が具体的に指名された。最も頻繁に挙げられた人物は子ども自身の姉であった（23回）。それについで、子ども自身の兄が14人で二番目に多く、姉妹・兄弟・兄妹も合計４回見られたことから、名付けの際、理由として指名される人物は子どもの兄弟であることが明かである。美咲（みさき）という女児について、「２人のお姉ちゃんとのつながりのある名前を考え、字画を考えて家族みんなで決めました」というメッセージのように、ことに兄弟のつながりを重視しているメッセージが多い。このことから、名付けは個人のアイデンティティを固定するだけではなく、まわりとの関係を強調し、意識をさせる行動であることが読み取れるであろう。一方では、名付けに関与した人に関する結果と同様に、祖父母に因み、名前を付けたというメッセージが７通で若干多かったが、全体的に少ないことが明らかである。この結果より、現在、名付けの際に核家族以外の親戚とのつながりを重視しない傾向が強いことが読み取れる。

親と子どもの名前における共通点

子どもと親の名前に用いられる字数を分析した結果、父と子どもの名前に用いられる字数が同一である名前が196（67.77％）となったのに対し、母と子どもの名前に用いられる字数が同一である名前が150（52.63％）となった（表２）。一見すると、字数を合わせている印象が持たれるが、名前に用いられる字数における流行の傾向が強く（小森，2002；

Unser-Schutz, 2016)、親と共通であることが意識されて付けられていたとは限らない。ことに性別に関係なく、母・父ともに名前に用いられる字数が同一であることが多いのは、日本の名前の長さがそもそも比較的統一していることを示している。

表２　親と子どもの名前の共通特徴の有無

＊字数：名前に用いられる字数、表記：名前に用いられる共通漢字の有無、右端（漢字）・左端（漢字）：名前の右端・左端に来る漢字が同一である、変更（漢字）：同一漢字だが、名前の中の位置が異なる、仮名：親子の名前が仮名表記

特徴		なし・同一でない		共通点あり	女児		男児		合計	
字数	母	135	（47.37％）	同一	80	（54.79％）	70	（50.36％）	150	（52.63％）
	父	89	（31.23％）		93	（63.70％）	103	（74.10％）	196	（68.77％）
表記	母	278	（47.37％）	右端	3	（ 2.05％）			3	（ 1.05％）
				変更	2	（ 1.37％）			2	（ 0.70％）
				仮名	2	（ 1.37％）			2	（ 0.70％）
	父	278	（47.37％）	右端			4	（2.88％）	4	（ 1.40％）
				変更			3	（2.16％）	3	（ 1.05％）

一方で、名前における共通表記が全体的に少なく、父と共通の字、母と共通の字を持っている子どもがそれぞれ７人となった。そのうち、父の名前と同じ字で終わる、つまり名前の右端が同一だというのが４人であったのに対し、字の位置（右端から左端、左端から右端）における変更が見られたものは３人であった。母の名前と同じ字で終わる子ども・母と共通の字の位置が変わった子どもがそれぞれ３人・２人となったが、さらに平仮名で表記されているという共通点を持った子どもが２いた。表記上の共通点は、子どもと同性の親の間にのみ見られ、男児の名前と母の名前に、また女児の名前と父の名前に共通の漢字が見られる親子がいなかった。

兄弟と子どもの名前における共通点

全部で、兄弟が73組となり、兄弟が最も多い組は４人兄弟であり、兄弟組には167人の子どもが含まれている（表３）。なお、残り118人には、兄弟がいるが、本研究で取り扱ったデータではそれが明らかになっていないだけ、という可能性もあることを念頭に置く必要がある。対象期間前に掲載された可能性もあるが、乙部町の「わがやのアイドル」は、親が任意にメッセージを送るという形をとっているため、何らかの理由より子どもが複数人いるが、全員に対してメッセージを送っていないことも念頭に入れる必要がある。[(3)]

表３　兄弟同士の名前の共通点の有無

＊一部：共通点のあるとない兄弟がいる（３・４人兄弟のみ）、字数：名前に用いられる字数、表記：名前に用いられる共通漢字の有無、拍数：名前が同一拍数なのか、音声：名前に用いられる音声的共通点の有無

兄弟組	組数	人数	非兄弟
	76	167	118

兄弟数	最大	M	SD
	4	2.20	0.43

共通点（兄弟組数）	特徴	なし		あり		一部	
	字数	11	（14.47％）	63	（82.89％）	2	（ 2.63％）
	表記	60	（78.95％）	13	（17.11％）	3	（ 3.95％）
	拍数	23	（30.26％）	47	（61.84％）	6	（ 7.89％）
	音声	39	（51.32％）	26	（34.21％）	11	（14.47％）

本研究で見られた兄弟組の間では、同一字数の名前を持っている兄弟が61組（80.26％）であった。その他に、３人・４人兄弟で、同一字数の子どもが２人以上いるが、同一字数でない兄弟もいるという一部が揃っている兄弟が４組であ

り、名前の表記に用いられる字数が揃っている兄弟が大半であった。親との共通点でも上述した通り、名前における字数の傾向が比較的明確であるため、この結果の深読みは危険である。字数ほどではないが、拍数に関しても47（61.48％）で大半の兄弟組が揃っているという結果になったが、こちらも、兄弟関係なく、字数と同様に名前の拍数上の長さが、そもそも特徴的であることが指摘できる。しかし、親と比べ、名前における共通点がその他に多かった。共通の漢字を持っている兄弟が13組で、全組の17.11％になり、その他に一部が揃っている兄弟組が３組であった。20人で、共通の部分が主に名前の右端、つまり最後の字が同一漢字であり、止め字で共通性を作り出していることが読み取れる（表４）。

名前が音声上揃っている（例：同じ音で始まる）兄弟も、26組（一部が揃っているものを含めて11組）となった。最後の字が揃っている兄弟が多いことから推測できるように、最も頻繁に見られた音声上の特徴は、右端という最後の音節が揃っていることであった（28人）。その大半が、「凌也（りょうや）」と「祐也（ゆうや）」のように最後の漢字も揃っていたが、「進之介（しんのすけ）」と「健之助（けんのすけ）」のように、必ずしもそうとは限らなかった。また、同じ音節が用いられるが、位置が変更された人が24人であった。順番が異なると、共通性が多少不明瞭になることもあるが、共通的であることが明らかだという、工夫された兄弟も見られた。例えば、ある３人姉妹では、長女の「茉凛（まりん）」の名前から、次女と三女に名前の一部が与えられ、次女が異なる字で同じ《ま》で「結愛（ゆま）」、三女が同じ字で若干異なる読みの「凛」で「凛愛（りあん）」と名付けられた。最後に、「怜子（れいこ）」と「竜輝（りゅうき）」、「果央（かお）」と「季生（きい）」のように、最初の音（左端の単音）が揃っている兄弟が25人であり、共通性を作り出す戦略として比較的頻繁に見られた。

表４　兄弟同士の名前の共通点（詳細・人数に関しては同一人物で複数特徴可）

＊一部：共通点のあるとない兄弟がいる（３・４人兄弟のみ）、字数：名前に用いられる字数、表記／右端・左端（漢字）：名前の右端・左端に来る漢字が同一である、表記／変更（漢字）：同一漢字だが名前の中の位置が異なる、表記／仮名：親子の名前が仮名表記、拍数：名前が同一拍数なのか、音声／右端・左端（音節）：右端・左端の音節が同一である、音声／変更（音節）：同一音節だが出現位置が異なる、音声／左端（単音）：最初の音が同一である

特徴		共通点 なし	共通点 あり	共通点 一部
字数	兄弟組	11	63	2
	人数	24	143	
表記	兄弟組	60	13	3
	人数	左端（漢字）	5	
		右端（漢字）	20	
		変更（漢字）	7	
		仮名	2	
拍数	兄弟組	23	47	6
	人数	52	115	
音声	兄弟組	39	26	11
	人数	左端（音節）	6	
		右端（音節）	28	
		変更（音節）	24	
		左端（単音）	25	

考　察

上記の結果をまとめると、現在、名付けに積極的に関与することが容認されているのは、主に生まれた子どもの親と子ども自身の兄弟という核家族であるとことが示唆されている。また、名付けに関与していることや名前上の共通点から見ては、ことに兄弟間の絆を深めることが重視されていると読み取れる。このことより、現在日本社会においては、名付け行為は、より複数世代の家族や分家・本家の家といった大きな集団の中に個人を位置付けるよりも、より小さな単位だという核家族の中の位置付けを確保するために機能していると言えるであろう。小林（2009）が論じるように、

個性的な名前の流行の背景に、公共性の喪失、つまり名付けの際の他者の負担等を認識しないことが進んでいるという捉え方が可能だが、「読めないことを許容する「個性的な名前」の増加は、公共空間の喪失の中でいかに親密空間に籠城して生きるかという指針の表れ」であり、「現在の子育ては親密空間である家族とそれを取り巻くコマーシャリズムの支配においてなされ」ている（小林康正，2009，p.23）。名付けへの関与を容認するのは、主に核家族であることも、小林の指摘した傾向ともかかわっているであろう。

だが、この結果を批判的に考察すれば、大きな問題点が主にあと二つ指摘できる。第一は、明記がないから関与していないとは言い切れないこと、第二は、第一とは逆に明記があるからその関与が積極的だとは限らないことである。前者は主に祖父母に関する記載のなさ、後者は兄弟に関する記載の多さとかかわっている。しかし、どの点においても、上記の解釈、つまり現在の名付け習慣が主に核家族内の関係を強化するために機能しているという主張はひっくり返らないのである。

いうまでもなく、メッセージの中で祖父母に関する記載がないからまったく関与していないというわけではない。意見を聞かせるといった、より消極的な形による相談が行われているとは十分に考えられる。Hendry（1989, p.39）が指摘するように、七夜や食い初めといった伝統的な習慣等に関心のない核家族でも、コミュニティの強い期待に逆らえず、結局参加することが多い。同様に、自身の意思とは関係なく、祖父母の関与が当然という雰囲気が合ったのであれば、メッセージの中でそれについて触れないという可能性もある。地域的にも、北海道は全国的に言っても３世代の同居率が非常に低く（Raymo & Kaneda, 2003）、この結果が北海道の家族を反映していても、全国的な傾向は十分に反映していないとも考えられる。しかし、記載がないからこそ、祖父母には名前を選ぶという決定権が与えられていないと断定できるであろう。また、消極的な形にせよ、祖父母との関係を明確にアピールしていることが少ないことから、祖父母が中心的な存在ではなくなっていることが読み取れるであろう。

また、メッセージを送らない家族の中に、祖父母との関係を重視している人が多い可能性も否定できない。どういう人がメッセージを送るのかは、当データから言及することは少なく、この方法の大きな問題点の一つである。しかし、コミュニティに我が子を紹介して絆を深めるというコラムの動機を考慮しては、決して交流を嫌がる人が多いとは考えにくい。むしろ、コミュニティの大事な一部だからこそ、家族関係を重視し、公の目にさらされてもよいと思っている人が多い、と推測できる。しかし、もしそうであれば、コラムにメッセージを送る親の方が交流に積極的だと考えられる。積極的に交流を求めているのに、通常なら主たる交流の場である家族内の関係を重視すると考えるのが自然であろう。それなのに、祖父母に関する記載がないのは、やはりメッセージを送る人の人間関係が特殊だからとは考えにくい。

反対に、子ども自身の兄弟が名前を選んだというメッセージについては、どこまで積極的にかかわっているのかという疑問も残る。そもそも、２才未満の子どもの兄弟は、恐らく同様に低年齢で到底自分自身の名前の漢字どころか、生まれた弟妹の名前に使えそうな漢字を読むことはできないであろう。兄弟が選んだと言っても、親が適切な候補の名前や、使っても良さそうな漢字のリストを作成し、その中から選ばせていると考えた方がよいであろう。そのように考えると、兄弟の役割はやはり消極的なものだと言えそうである。

だか、そうならば、親が、果たしてなぜ、兄弟が選んだとメッセージで綴るのであろうか。何らかの効果を期待し、そのように兄弟に関与させ、またメッセージで書いていると考えるのが妥当であろう。効果というのがキーワードだが、名付けにかかわらせることが、関係を深めることにつながるとすれば、親がやはり子ども同士の親密な関係構築を狙っていると考えられる。名前の由来が、一生涯幾度も繰り返して出没する物語だと捉えれば、その度に子ども同士の関係が強調され、注目されることが明らかである。

兄弟の絆を強調することには、実用的な役割もある。上の兄弟からすると、下の兄弟が生まれることで、自分の位置付けや親との関係が大きく変わるのである。それによって嫉妬や不安を感じる子どもも多いが、上の兄弟に特別な役割を与えることにより、その変化をより肯定的に受け止められることもある。例えば、経験が豊富で物事が理解できるお兄さん・お姉さんだということを強調することで、上の兄弟に、自分が特別な立場にいることが感じさせられる（Hendry, 1989, p.56）。つまり、お兄さん・お姉さんの役割と特別さを強調することが、よい関係作りの戦略である。上の兄弟の名付けにおける役割を過剰に評価することも、そういった戦略の一部として解釈できるであろう。

結　論

本論の冒頭でも述べたように、名付けは個人のアイデンティティを固定するのみならず、他者との関係を強化し、絆を深める役割があると考えられる。本研究で明らかになったように、名付けにおける変化が、家族における変化も示しており、ことに現在の日本社会では、核家族内の絆が重視されている傾向を反映していると解釈した。いうまでもなく、本研究に用いられたデータは、比較的短いメッセージであるため、様々な事情や情報が省略されており、名付けの過程を完璧に反映しているとは到底いえない。もっとも、名付けの過程は、妊娠発覚から届出の〆切である出産後14日間で、ゆっくりじっくりと時間をかけて進むものであり、多くの人にとっては、楽しみでありながら悩みの種でもあろう。短いメッセージのよい点は、むしろ省略的だからこそ、親から見る最も重要な点が挙げられている可能性が高いことであるが、現在の名付け習慣に対する理解を深めるために、今後は、対象のデータを広げ、研究を進める必要がある。

その中でも、名付けにおける対立や衝突を分析することが、とくに理解を深める方法だと考えられる。本研究でも明らかになったように、名付けは主に核家族において行われているが、他者の関与が親に積極的に認められなくても、他者が関与しようとしないとは限らない。本当は参加したくなくても、コミュニティからの期待やプレッシャーに負け、伝統的な行事等に参加する Hendry（1989）の核家族のように、名付けの際、名前を決めないといけない親が、自身の親や兄弟、友人といった様々な人々と接し、アドバイスや忠告等を受ける。その多くが、消極的なものだと推測できるが、そうではない場合もある。発言小町で「実母に子の名前候補を反対されました」という投稿（まな，2014）から読み取れるように、名付けの際の衝突が家族内に溝を作り出すこともある。家族内の意見割れや名付けの方針や有り方による対立のケース・スタディーを分析することにより、名付け習慣と家族関係における変化に対する理解がさらに深められるであろう。

参考文献

Asia-Plus（2015）. Tajik authorities prepare a list of Tajik names. Asia-Plus. 2015, December 3.〈http://news.tj/en/news/tajik-authorities-prepare-list-tajik-names〉（2016, November 16）

Benson, S.（2009）. Injurious names: Naming, disavowal, and recuperation in contexts of slavery and emancipation. In G. vom Bruck & B. Bodenhorn（Eds.）, *An anthropology of names and naming*（pp.178-199）. Cambridge: Cambridge University Press.

Bodenhorn, B., & vom Bruck, G.（2009）. “Entangled in histories”: An introduction to the anthropology of names and naming. In G. vom Bruck & B. Bodenhorn（Eds.）, *An anthropology of names and naming*（pp.1-30）. Cambridge: Cambridge University Press.

円満字二郎（2005）．人名用漢字の戦後史　岩波書店

Goodman, R.（2011）. Shifting landscapes: The social context of youth problems in an ageing nation. In R. Goodman, Y. Imoto, & T. Toivonen（Eds.）, *A sociology of Japanese youth: From returnees to NEETs*（pp.159-173）. London: Routledge.

橋本淳治・井藤伸比古（2011）.「子」のつく名前の誕生　仮説社

Hendry, J.（1989）. *Becoming Japanese: The world of the pre-school child*. Honolulu: University of Hawai’i Press.

平山亜紀（2011）．名づけの変遷：人名漢字と読みの相関に注目して．文化環境研究，**5**，38－46.

本田明子（2005）．赤ちゃんの名付け．日本語学，**24**(12)，54－62.

寿岳章子（1990）．日本人の名前　大修館書店

株式会社マーシュ（2015）．名前に関するアンケート調査　株式会社マーシュ　2015年１月９日〈https://www.marsh-research.co.jp/examine/ex2612name.html〉（2016年９月25日）

小林大祐（2001）．名前の社会学的分析に向けて：漢字がつくる同一性のなかの差異　評論・社会科学，**65**，23－41.

小林康正（2009）．名づけの世相史―「個性的な名前」をフィールドワーク　風響社

国立国語研究所（2016年）．概要UniDic　国立国語研究所　2016年３月２日〈http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/unidic/〉（2016年11月18日）

国立国語研究所（2016b）．Web 茶まめ　国立国語研究所　2016年６月14日〈http://chamame.ninjal.ac.jp/〉（2016年11月18日）

小森由里（2002）．Trends in Japanese first names in the twentieth Century: A comparative study　国際基督教大学学報．III-A，アジア文化研究，**28**，67－82.

京丹後市秘書広報広聴課「広報きょうたんご 生命の絆」係（2010）．生命の絆．広報きょうたんご，**80**(11)，29.

牧野恭仁雄（2012）．子供の名前が危ない　ベストセラーズ

まな（2014）．実母に子の名前候補を反対されました　発言小町　2014年２月２日〈http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2014/0221/644722.htm〉（2016年10月１日）

マッセ大阪（2013）．平成24年度研究会「自治体広報のあり方研究会」報告書　マッセ大阪　2013年３月〈http://www.masse.or.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/17/jititaikouhou.pdf〉（2016年11月７日）

西野理子（2009）．長男長女と一人っ子が増えた？　藤見純子・西野理子（編）現代日本人の家族―NFRJ からみたその姿（pp.26－35）　有斐閣

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, **6**, 1490.

Otake, T. (2012). What to call baby? The Japan Times. 2012, January 22.〈http://www.japantimes.co.jp/life/2012/01/22/life/what-to-call-baby/#.WCBFgSSN7J9〉(2016, November 7).

大藤修（2012）．日本人の姓・苗字・名前―人名に刻まれた歴史　吉川弘文館

乙部町町民課（2016）．人口統計　乙部町　2016年11月７日〈http://www.town.otobe.lg.jp/section/choumin/e0taal00000002h2.html〉（2016年11月18日）

乙部町総務課企画係（2010）．第１次基本集計結果　乙部町　2010年３月19日〈2016年11月21日，から http://www.town.otobe.lg.jp/section/kikaku/e0taal0000000fnc-att/e0taal0000000npq.xls〉（2016年11月21日）

乙部町総務課企画係（2012）．年齢階層別人口　乙部町　2012年６月18日〈http://www.town.otobe.lg.jp/section/kikaku/e0taal0000002hxu-att/e0taal0000002ifx.xls〉（2016年11月21日）

乙部町総務課企画係（2015）．編集後記．広報おとべ，（548），18.

Plutschow, H. (1995). *Japan's Name Culture: The Significance of Names in a Religious, Political & Social Context*. London: Routledge.

Raymo, J. M., & Kaneda, T. (2003). Changes in the living arrangements of Japanese elderly: The role of demographic factors. In J. W. Traphagan & J. Knight (Eds.), *Demographic change and the family in Japan's aging society* (pp. 28-52). Albany, NY: State University of New York Press.

佐藤稔（2007）．読みにくい名前はなぜ増えたか　吉川弘文館

田中克彦（1996）．名前と人間　岩波書店

田中宣一（2014）．名づけの民俗学　吉川弘文館

Thang, L. L. (2003). General reengagements: Changing demographic patterns and the revival of intergenerational contact in Japan. In J. W. Traphagan & J. Knight (Eds.), *Demographic change and the family in Japan's aging society* (pp. 77-88). Albany, NY: State University of New York Press.

Toivonen, T., & Imoto, Y. (2011). Making sense of youth problems. In R. Goodman, Y. Imoto, & T. Toivonen (Eds.), *A sociology of Japanese youth: From returnees to NEETs* (pp.1-29). London: Routledge.

徳田克己（2004）．名づけの心理２：読みにくい名前の分析　日本教育心理学会総会発表論文集，（46），623.

Unser-Schutz, G. (2014b, January). Selecting data on names: City newsletters as a resource for Japanese names research. Paper session presented at the American Names Society, Minneapolis, MN.

Unser-Schutz, G. (2015).「キラキラネームといわないで！」：新しい名前に対する評価とその現象に取り巻く言説　立正大学心理学研究所紀要，**13**，35－48.

Unser-Schutz, G. (2016)．現代日本における名付け事情とその変遷－ジェンダーという側面から立正大学心理学研究所

紀要，**14**，88－99.
Willson, K.（2009）. Name law and gender in Iceland. *CSW Update Newsletter*,（June），8-11.
安岡孝一（2011）．新しい常用漢字と人名用漢字－漢字制限の歴史　三省堂

註

１）ただし、悪魔ちゃん事件で、子どもの利害に反する名前を付けることに対する弱い判決がすでに出ている。詳細については安岡（2011）を参照。

２）訳はすべて筆者による。

３）残りの118人の中には兄弟の可能性が高いが、誤字である可能性があるものも見られた。例えば、苗字・地域、父の名前が共通だったが、母の名前がそれぞれ「由佳」と「由香」で同じ読みだと考えられる、という子どももいた。独断を避けるべく、こういった例は兄弟として処理しなかった。